慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シラー『哲学書簡』における「過ち」の詩学：『失われた名誉ゆえの犯罪者』との比較から
Sub Title	Irrtumspoetik in Schillers Philosophischen Briefen im Vergleich zu dem Verbrecher aus verlorener Ehre
Author	厚見, 浩平(Atsumi, Kohei)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2023
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.124, (2023. 6) ,p.211 (50)- 223 (38)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01240001-0211

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シラー『哲学書簡』における「過ち」の詩学
――『失われた名誉ゆえの犯罪者』との比較から

厚見　浩平

はじめに

シラー（Friedrich Schiller, 1759–1805）の『哲学書簡』（Philosophische Briefe, 1786）は、彼自身が主宰する雑誌『タリーア』（Thalia, 1785 – 91）第3号に掲載された散文作品である。この時発表されたのは、「前書き」（Vorerinnerung）、2人の青年ユーリウス（Julius）とラーファエル（Raphael）による架空の往復書簡、そしてユーリウスがラーファエルとの交流に触発されて書き留めた思索の記録という体裁を取る「ユーリウスの神智学」（Theosophie des Julius, 以下「神智学」と略記）の3部であった。その後1789年には、続編としてシラーの友人ケルナー（Christian Gottfried Körner, 1756–1831）が執筆した「ラーファエルからユーリウス宛て」書簡が『タリーア』第7号に掲載されている。しかし、シラー自身が「神智学」より先を書き継ぐことはなく、『哲学書簡』は未完に終わった。

成立の経緯は詳らかでないが、ナツィオナール版全集の注釈によれば、その起源はシラーがカール学院に所属していた1770年代まで遡ることができるという。[1] また、『1782年詞華集』（Anthologie auf das Jahr 1782）に収録された詩『友情』（Die Freundschaft）にも、「ユーリウスからラーファエル宛の書簡、まだ未出版の小説から」（NA1, 110）という但し書きが認められる。果たして「神智学」では、この『友情』の第3連から第10連までが引用されており、少なくとも1780年代前半までには『哲学書簡』の下地が整えられていたと考えてよい。

このため、松山雄三が指摘するように、たしかに『哲学書簡』はカール学院時代前後の「若いシラーの思想を最も集約的に包含するもの」[2] となっている。その性格はとりわけ「神智学」に強く表れている。この箇所は、「世界と思考す

る存在」、「理念」、「愛」、「犠牲」、「神」の5章から構成されており、先行研究で集中的に取り上げられてきた。例えば、ヴァルター・ヒンデラーは『ドン・カルロス』（Don Karlos, 1787）ならびに『カリアス書簡』（Kallias oder über die Schönheit, 1793）と、ギュンター・ザーセは『たくらみと恋』（Kabale und Liebe, 1784）と「神智学」を比較し、シラーにおける「愛」の概念を論じている。[3] また、ニコラス・ペーテスや津田保夫をはじめ、『哲学書簡』のうちに後の美学思想の萌芽を見出そうとする論考も目立つ。[4] このように、『哲学書簡』は専ら「若いシラーの思想」を知るための手掛かりとして、シラーの美学的著作や『ドン・カルロス』といった特定の文芸作品と比較される傾向にあった。[5]

しかし、哲学的著作であることは『哲学書簡』の持つ一側面に過ぎない。マリオン・ヒラーが指摘するように、この作品が「理論的・思弁的なのではなく、具体的な個々の登場人物の生の記述（Lebensäußerungen）として構想されている」[6] 点にも注意を向けなければならない。彼女の論文は『哲学書簡』研究の主流に一石を投じ得るものだが、既にしばしば取り上げられてきた『ドン・カルロス』を比較対象としている憾みが残る。そこで、本論文では『友情』の記述も踏まえ、『哲学書簡』を単なる思想の集約ではなくユーリウスという「登場人物の生の記述」を軸とした「小説」として定位することを目指し、シラーの小説作品『失われた名誉ゆえの犯罪者』（Der Verbrecher aus verlorener Ehre, 初版：1786, 改版：1792, 以下『犯罪者』と略記）と比較・対照させる。

『犯罪者』の初出は『哲学書簡』と同年の『タリーア』第2号であり、実在の犯罪者をモデルとして、一人の人間が軽微な犯罪に始まり、やがて殺人にまで手を染める段階的なエスカレーションの過程と、そこからの改悛が描かれる。一続きの物語であるが、内容から全体は3つの部分に大別できる。語り手によって犯罪や犯罪者に焦点を当てる意義が説かれた前書き、主人公クリスティアン・ヴォルフ（Christian Wolf）の境遇を、幼少期から3年の過酷な懲役に至るまで綴った本編前半部、そして法廷や教誨師の前でヴォルフが証言した事柄を書き留めた架空の手記を中心とする本編後半部の３つである。発表時期や掲載媒体のみならず構成も『哲学書簡』と類似しており、『犯罪者』はこれまで等閑視されてきたにもかかわらず、比較対象として好適であると考えられる。

以上を踏まえ、次章以降では『哲学書簡』と『犯罪者』との対応関係を確認しながら、両者が表裏一体の小説作品であることを明らかにしていきたい。

1. 「理性の小説」としての『哲学書簡』

1.1 「私たちは、極端を通じてより他に真理へ至ることは滅多にない」
――『哲学書簡』の「前書き」における理性とその「過ち」

まず、『哲学書簡』の「前書き」を辿っていこう。この「前書き」は、末尾に「私たちが以下の往復書簡を読み、判断する上で望ましい観点を述べるために、予め言及しておかなければならなかった」（NA20, 108）と記されている通り、後に続くユーリウスとラーファエルの書簡に関する解題となっている。

その冒頭では、『哲学書簡』の主題が「理性」（Vernunft）であることが提示される。語り手によれば、「理性には時代があり、心（Herz）と同様に宿命を持っているが、その歴史は［心と比して　―引用者註］はるかに稀にしか取り扱われることがない」（NA20, 107）。語り手がこの不均衡を問題視するのは、理性の座である「頭脳が心を形づくるに違いない」（Ebd.）、と考えているからである。彼は「混迷とした理性」（die umnebelte Vernunft）と「明晰な思考」（[e]in erleuchteter Verstand）を対置し、前者を「道徳の頽廃」を助長する要因と見做す一方、後者には「心情をも純化する」役割を期待している。（Ebd.）このように「前書き」の冒頭では、理性と心、もしくは理性と道徳との関係をめぐって、理性に優位を認めつつも、それらに一種の相関関係を見出し、相互的に把握する重要性が説かれているのである。

上で示された道徳観については、イギリス感情主義からの影響が指摘されてきた。[7]しかし、理性と道徳の相関関係を「書物の単純化かつ広範化」（Ebd.）と結びつけたのは、語り手、ひいてはシラー独自の着眼点と言ってよい。[8]戸叶勝也が指摘するように、18世紀後半のドイツでは出版点数が大幅に増加し、読者層も急速に拡大した。[9]その結果、情報を取捨選択する術を持たない新たな読者の脆弱な理性は混乱をきたし、「中途半端な啓蒙」（Ebd.）が生じてしまった。「前書き」冒頭で語られた理性の時代的宿命とは、この「中途半端な啓蒙」を指す。しかし、語り手はこのような事態をただ一方的に糾弾しているわけではない。むしろ、人間がより高次の段階へ至るために必要不可欠な契機として、肯定的に捉えている。曰く、「私たちは、極端（Extreme）を通じてより他に真理へ至ることは滅多にない」（Ebd.）。また、「静かな叡智という素晴らしい目標へ何とか上っていく前に、私たちは ―― しばしばナンセンスでもある ―― 過ちを予め犯さ

なければならない」(Ebd.)、とも彼は述べている。

さらに、語り手は「前書き」の後段で、「過ち」を「熱狂する理性の逸脱(Ausschweifungen)」あるいは「懐疑論(Scepticismus [sic])と無神論(Freidenkerei)」と言い換え、それらを「人間精神の熱発作(Fieberparoxysmen)」に例える。(NA20, 108)病気は人間を消耗させるが、一方で治癒した後から振り返れば、「最終的に健康を強固にする」(Ebd.)という利点も認められる。同様に、「過ちが幻惑させればさせるほど、そして唆せば唆すほど、真理にとっては一層の勝利となり、疑いが苦しめれば苦しめるほど、確信と確かな知への欲求は一層大きくなる」(Ebd.)、と語り手は主張し、その意義を強調する。彼によれば、このような思想的な過ちを恐れる必要はない。なぜなら、「悪人が徳、そして宗教を認めないとしても、それらがほとんど失われないのと全く同じように、血気盛んな若者が真理を見誤ったとしても、真理から何かが失われることはない」(Ebd.)からである。裏を返せば、「徳」や「宗教」、あるいは「真理」が存在する限り、例え一時道を踏み外そうとも、人間はいつか正しい方向へ進むことができるということになる。思想的な逸脱を、そこからの更生に積極的な価値を認めて肯定している点は特筆に値すると言えよう。

1.2　ユーリウスの「過ち」とラーファエルの治療

では、「前書き」で焦点を当てられていた「過ち」は、ユーリウスとラーファエルの言動を通じてどのように描かれるのだろうか。以下で確認していきたい。

書簡が交わされる物語内の現在において、ユーリウスは精神的危機に陥っている。ラーファエルとの別離が引き金とはなったが、その直接的な原因は彼がユーリウスに「考えるということ教えた」(NA20, 109)ことにある。ユーリウスによれば、ラーファエルと出会う以前は、「僕は幸福だと感じていたし、僕は幸福だった」(Ebd.)。彼はその頃を以下のように振り返っている。

> 天国のように幸福だった時。僕がまだ目隠しをされ、人生を酔っぱらいのようにふらふらと過ごしていたあの時。[…] 死を告げる鐘の音だけが永遠を、幽霊譚(Gespenstermährgen [sic])だけが死後の説明を思い出させてくれたあの時。僕がまだ悪魔におののき、それだけに一層心から神にすがるようになっていたあの時。(Ebd.)

しかし、ラーファエルは「自分自身の理性の他には何者も信じるな」、「真理の他に何も神聖なものはない」、あるいは「理性が認識するものが真理なのだ」、とユーリウスを教え諭した。（NA20, 111）その結果、彼は上の引用にも表れている「神」への尊敬の念を捨て、理性だけを信奉するようになる。しかし、「わが理性こそ今や僕の全て」（Ebd.）と考えるようになったユーリウスは、今度は「懐疑論や無神論」という「過ち」へ陥ってしまうのである。

信仰心の篤かったユーリウスが今や神の存在を疑い、「創造主なしで事足りるなら、何のために僕は神なんかを必要とするのだ？」（NA20, 110）と自問するまでになった。その一方で気力を失い、「僕は幸せではない」（NA20, 113）とも感じている。

自力で回復することはもはや不可能と考えたユーリウスは、「君の手による治療だけが、僕の焼けるように痛む傷を癒すことができるのだ」（Ebd.）、と訴えて、ラーファエルに自らの治療を委ねる。しかし、ラーファエルの反応は彼にとって意外なものであった。彼はユーリウスの「病気」を次のように診断する。

> 君は克服しなければならない病気を抱えている。その病から君は自分ひとりで、自分自身によって完全に回復することが出来るし、そうすることでぶり返しを確実に防ぐこともできるのだ。君が孤独を感じれば感じるほど、それだけ一層君は自分自身の内に全き治癒力を漲らせるだろうし、偽りに過ぎない一時凌ぎの緩和剤によって一瞬だけ楽になったと感じることが少なくなれば少なくなるほど、それだけ一層確実に悪を根本から取り除けるだろう。（Ebd.）

彼によれば、「病気」の根治に向けたプログラムは既に開始されている。例えば、彼がユーリウスの元を離れたことや、「甘い夢から君を目覚めさせたこと」（Ebd.）も処置の一環であった。彼はそれらの行為を「予防接種」（Einimpfung）と呼び、ユーリウスに敢えて試練を課すことは自分の「義務」であったと嘯く。（NA20, 114）その上でラーファエルは、自己更生を完遂するためには、「僕が君の探究の過程を追跡しなければならない」（Ebd.）と記して、「神智学」を送るようユーリウスに頼む。

1.3　ユーリウスとグラモン

こうして開陳される「神智学」は、既述の通り過去の覚え書であり、未完で終わった『哲学書簡』自体も結末部を欠いているため、ラーファエルの治療が功を奏したかどうか、われわれが知ることは叶わない。しかし、若きシラーの経験からある程度類推することは可能である。

ユーリウスの造形には、シラーとカール学院で同窓生であったグラモン（Joseph Frédéric Grammont, 1759 – 1819）と、彼が在学中に陥った精神的危機が明らかに投影されている。彼もまた、宗教と理性のどちらを自らの精神的支柱とすべきかで苦悩した青年であった。1780年の夏、グラモンは希死念慮を仄めかすほど重度の鬱状態に陥り、アーベルを筆頭とするカール学院の教授陣の指示で、シラーは他の同級生とともに彼を介抱する傍ら、その病状や治療経過の記録を担当することになった。（NA22, 352）このような経緯で纏められた報告書が、『生徒グラモンの病気について』（Über die Krankheit des Eleven Grammont, 1780）である。

全8通からなるこの記録の中で、シラーはグラモンに生じた病気を、「まさしく心気症（Hypochondrie）に他ならない」（NA22, 19）と断言している。彼によれば、この病は「身体と魂との真の連繋」（Ebd.）に由来する問題である。グラモンのそれを乱した原因として、シラーは宗教的熱狂と形而上学を挙げている。彼によれば、「敬虔主義の熱狂は、［…］彼の考えを混乱させた」（Ebd.）。さらに、「形而上学の勉強により、彼は結局あらゆる真理を疑うようになり、別の極端へ（zum andern Extremo）引き寄せられてしまった」（Ebd.）。以上を踏まえ、シラーはグラモンの精神的危機に対し、両者の板挟みとなって「彼の優れた心が耐えられなくなったのだ」（Ebd.）、と最終的な診断を下すのである。

シラーは献身的に治療に協力したが、病状は寛解と再発を繰り返し、努力虚しくグラモンはカール学院の退学を余儀なくされた。（NA22, 353）ヴォルフガング・リーデルは、『生徒グラモンの病気について』とその帰結を踏まえ、『哲学書簡』は現実には失敗に終わった治療計画のやり直しであり、ユーリウスという「架空の犠牲者」は、ラーファエルという「治療者」によって「幸福な運命」を得ることになる、と主張している。[10] しかし、リーデルの見解は根拠に乏しく、論者による希望的観測の域を出ていない。ユーリウスの危機をより深く理解するためには、『哲学書簡』以外の作品から多角的に考察する必要がある。そこで、

次章では『犯罪者』を取り上げ、この点を検討していきたい。

2.「心の小説」としての『犯罪者』

2.1 「人間の全歴史中、過ちの記録ほど心と精神にとり教訓的なものはない」
――『犯罪者』の前書きにおける「心」と「歴史」

『犯罪者』は、「人間の全歴史中、過ち（Verirrungen）の記録ほど心と精神にとり教訓的なものはない」(NA16, 7)、という一文で幕を開ける。ここで「精神と心」ではなく、「心と精神」という順番になっているのは、偶然ではない。実際、語り手はこの前書きで『犯罪者』を「心」の物語として規定しようとしている。

彼によれば、「過ち」がわれわれにとって重要なのは、「欲求という力の密やかな動きは通常の興奮という朧げな光の下では隠されてしまっている」が、「情念の猛り狂う状態においてはそれが一層突出し、膨れ上がり、明瞭になる」からである。（Ebd.）「情念が猛り狂う状態」とは、具体的には犯罪ないし犯罪時の心理状態を指す。彼によれば、「どの大きな犯罪にも、相当に大きな力が活動していた」（Ebd.）。ここで、語り手の関心は明らかに心のはたらきへ向けられ、「過ち」には、そのはたらきを増幅して可視化する役割が期待されている。

しかし、心の全容を解明するには困難が伴う。なぜなら、「人間の心とは、かくも単純でありながら、しかしまた、かくも複雑なものである」（Ebd.）からである。語り手は、そのような心の特性を以下のように説明している。

> ある能力ないし欲望と、まさしく同じものが千ものかたちや方向をとって活動することもあれば、千もの矛盾する現象を引き起こすこともあり、千もの性格のうちに別のかたちで混ざり合って現れることもある。また、同一でない千もの性格や行為が一つの傾向から作られることもある［…］。（Ebd.）

このように心のはたらきは複雑な表れ方をするため、表面的な理解では不十分である。したがって、犯罪を含め心に端を発する諸問題は本来、「鋭敏な人間研究者」（der feinere Menschenforscher）が「心理学」（Seelenlehre）の対象として慎重に考察しなければならない。（Ebd.）[11]

ところが、この問題は過去も現在も、歴史の領域で歴史家たちにより語られてきた。語り手は、「歴史の通例の取り扱いには、少なからぬ意義を唱えることができる」（Ebd.）と述べ、そのことに対する不満を隠さない。彼によれば、「歴史的主体と読者の間には、比較や適用のあらゆる可能性を遮る［…］隙間がある」（NA16, 8）。それを埋めるためには、「読者が英雄（Held）のように熱狂するか、英雄が読者のように冷静になるかのいずれかしかない」（Ebd.）、と彼は主張する。古来、歴史家は前者の方法を採用してきたが、それは「読者の共和主義的自由」、すなわち読者が歴史記述を基に判断する自由の「簒奪」に他ならない。（Ebd.）したがって、歴史を記述するにあたっては後者の方が適切である。語り手によれば、この方法には、「試練を受けていない真っ直ぐな徳の持ち主が、頽廃した徳の持ち主を見下すとき概して見せる、おぞましい嘲笑や傲慢な確信を根絶やしにする」（NA16, 9）、という利点もある。なぜなら、「頽廃した徳の持ち主」は「異種の生物」などではなく、単に「不幸な者」に過ぎないからである。（NA16, 8）語り手はここで、犯罪や犯罪者を他人事として捉えようとする傍観者的態度を戒めている。『犯罪者』の前書きでは以上のように、「歴史」がある個人の内面誌として規定され、いわば読者の鏡として非英雄的人物を取り上げる重要性が説かれているのである。

2.2 「彼は最初の過ちを犯す以前よりむしろ、頽廃の頂点に上って善人に近づいたのかもしれない」 ――『犯罪者』本編における「過ち」

では、『犯罪者』で主人公ヴォルフの「歴史」がどのように展開されているのか、本編を順に追って確認していこう。本作でヴォルフは英雄的人物ではなく、あくまで等身大の弱い人間として描かれている。生家は「太陽軒」という名の宿屋で、彼は早くに亡くなった父に代わって母を手伝っていた。貧しく、また「自然が彼の身体を醜く作った」（NA16, 10）という点では「不幸な者」であったが、決して生来の札付きではなかった。しかし、ヨハンナという女性の歓心を得ようと身の丈に合わない浪費を繰り返し、家計が悪化してしまう。困った彼は、密猟に手を出す。密猟は、「彼の前にも後にも何千の人々が幸運に恵まれて上手くやってのけた方策」（Ebd.）であるが、彼の場合は恋敵のローベルトの密告により3度捕まり、仕舞いには3年の懲役を科されることになった。過酷な懲罰という「不幸の重みの下、彼の反抗心は高まった」（NA16, 11）。

刑期を終えた彼は、真っ先に故郷の町へと向かう。しかし、母は亡くなり、愛するヨハンナはいまや娼婦に落ちぶれていた。街の人々も、腫れ物に触るように彼に冷たく接する。人としての尊厳を極限まで踏みにじられたヴォルフは、「名誉の欠乏に耐える術を身につけることが、自分に残された最後の逃げ道だ」（NA16, 14）と悟り、社会や法に逆らって生きる決意をする。世間への怨みを胸に密猟を再開したヴォルフは、森の中で狙っていた獲物の背後に偶然ローベルトを発見し、彼を銃で射殺してしまう。しかし、その際ヴォルフは何の躊躇もなく引き金を引いたわけではない。以下のように、そこに至るまでの逡巡や葛藤も克明に描かれている。

> この瞬間、まるで全世界が我が銃の射程内にあって、私の全人生の憎しみが、一押しすれば人を死に追いやれるだろう自分の指先に集まってくるかのような気がした。目に見えぬ恐ろしい手が私の目の前に浮かび、我が運命の時計の針は、否応なくこの暗黒の時間を指していた。［…］一分ほど私の銃の先は人間と鹿との間をさまよい、その間で照準が定まらなかった。一分—さらに一分—また一分。復讐と良心がずっと定まらず鬩ぎ合っていたが、復讐が勝り、狩人は息絶え、地面に倒れた。 (NA16, 15f.)

その後も密猟や強盗を続け、ドイツ中に悪評を轟かせたヴォルフであったが、語り手によれば、「悪徳こそがその不幸な者への教育を成し遂げた」（NA16, 24）のだという。さらに、「彼は最初の過ち（Fehltritt）を犯す以前よりむしろ、頽廃の頂点に上って善人に近づいたのかもしれない」（Ebd.）、とさえ彼は述べている。このように語り手は、悪徳こそがヴォルフの更生を促したのだ、と主張して、その積極的意義へ読者の注意を向けさせるのである。

ヴォルフが最終的に改心するきっかけは、「代官」（Oberamtmann）との出会いによってもたらされる。役所に拘留されたヴォルフに対し、代官は最初語気荒く尋問を行うが、どうしても口を割ろうとしない態度を前に、「このよそ者はやはり無実かもしれない」と考え直し、「礼儀と落ち着きをもって」接することに決める。（NA16, 28）翌日、代官はヴォルフに、「当初かっとなってしまったことをお許しください、私は昨日、少々厳しくあなたを叱責してしまいました」（Ebd.）と非礼を詫び、丁重に扱った。この慇懃さに感銘を受けたヴォルフはと

うとう代官に胸襟を開き、「私が太陽軒なのです」(NA16, 29) 、と自らの正体を明かす。

ザラ・バンゲルトとクラウス・ミュラー=リヒターは、この告白が自由意志によってなされた点に注目する。自らの罪を認め、それに対する罰を引き受ける覚悟と自覚を証明したことで、ヴォルフという人間の主体化が完成した、と彼らは主張する。[12] また、トーマス・ヌッツも、彼の自白を「道徳的主体としてのヴォルフの自己再生」[13] と見做している。『犯罪者』は、悪徳を極め尽くした果てに自己更生の機縁を見出した人間の、堕落と再生の「歴史」なのである。

3. 『哲学書簡』における「過ち」の詩学

上で見てきた通り、『哲学書簡』も『犯罪者』も畢竟、「過ち」へ至る過程とそこからの脱却をライトモチーフとした作品である。しかし、そのアプローチ方法は両者で異なっている。

『哲学書簡』の「前書き」では、理性と心に相関関係が認められていた。つまり、一方が弱まれば他方の機能も弱まり、片方が強化されればもう一方の機能も強固になる、と考えられている。ただし既に触れた通り、ここで話題とされるのは、あくまでも理性が心へ与える影響である。逆に、心から理性への働きかけには言及がない。これは、『哲学書簡』が理性、なかんずく理性の「過ち」に焦点を当てた作品であることを示している。

果たして、その登場人物であるユーリウスは「懐疑癖と無神論」に苦しめられている。それは、「人間精神の熱発作」であり、「熱狂する理性の逸脱」であり、極端な思考である。彼の「病」はラーファエルが授けた教えに起因しており、今まで拠り所としていた神への信仰と、新たに知った理性中心の世界観との間で生じた葛藤と見做すことができる。そして、「私たちは、極端を通じてより他に真理へ至ることは滅多にない」という「前書き」の綱領的な文言に呼応して、ラーファエルはこの葛藤を不可避かつ必要不可欠な事態と捉え、ここにユーリウスがさらなる高みへと上る契機を見出すのである。

一方で、『犯罪者』は人間の心とその「過ち」を取り上げた作品であると言える。前章で確認した通り、その前書きで語り手は、犯罪といった表層的行為だけでなく、その際にはたらく複雑な心の作用へも注意を促していた。彼にとっ

て「歴史」とは、このような心のはたらきを含め、人間を総体的に描き出そうとする営為である。「激しい情念」を伴う犯罪は、心の作用を観察する絶好の機会であり、その対象に相応しい。しかし、従来の歴史家は英雄的人物やその行為ばかりに注目してきたため、読者の関心を十全に掬いきれなかった。語り手の目標は、歴史家に対抗して主人公を読者と等身大の人物に設定し、その姿を通じて、「頽廃した徳の持ち主」に対する「おぞましい嘲笑や傲慢な確信を根絶やしにする」ことに置かれる。

密猟に始まり、最終的に殺人まで犯してしまうヴォルフは、まさしく「頽廃した徳の持ち主」である。しかし、先に論じたように、語り手は彼を決して「異種の生物」とは描かなかった。彼は、世間から冷たくあしらわれた怒りゆえに一線を越えてしまった「不幸な人」に過ぎない。法や社会への復讐を決意した後も、彼が良心を完全に捨て去ることはできなかった。その呵責は「頽廃の頂点」において最高潮に達し、遂にヴォルフは更生への第一歩を踏み出す。『哲学書簡』と同様に、ここでも「過ち」を犯し尽くすことが、事態の好転に必要不可欠な手続きと見做されている。さらに、一個の人間として彼を尊重しようとする代官の態度は、更生の強力な後押しとなった。無理に手を加えるのではなく、自発的な反応を引き出そうとする代官の振舞いは、ラーファエルのそれと重なり合う。

ユーリウスもまた、ヴォルフと同じく読者と等身大の悩める主人公であり、「中途半端な啓蒙」が出来した時代の、一読者像に他ならない。彼がその「病」から回復するにせよ、グラモンのように破滅へ至るにせよ、信仰と無神論の狭間で喘ぐ彼の姿は、一方では因習からの逃れ難さや、理性を適切に使用する困難を読者に提示し、人間精神の脆弱性を露わにする。しかし、他方ではその脆弱性が「真理」へ至る唯一無二の原理とも見做される。ユーリウスの惑いとは人間の弱さそのものであり、それは読者自身の問題として突きつけられる。同時に、その「過ち」に積極的な意味づけを与えようとすることに、『哲学書簡』の意義がある。

無神論の問題については本論文で踏み込めなかったが、福田喜一郎によれば、それは「世界観や人生への態度決定」といった「現代的問題と捉え直すことができる」。[14]ユーリウスの危機は他人事ではない。『哲学書簡』は、それを手に取る者を今なお挑発し続けてやまない「小説」なのである。

註

1 Schillers Werke. Nationalausgabe. Begründet von Julius Petersen, fortgeführt von Lieselotte Blumenthal und Benno von Wiese, hrsg. von Norbert Oellers [seit 1991], Weimar 1943 ff, hier: Bd. 21, hrsg. von Benno von Wiese, 1963, S. 151. 以下では当該全集をNAと略記し、引用の際は本文中に巻数と頁数を添える。

2 松山雄三「若いシラーとChr. ガルヴェ ―シラーの『哲学的書簡』をめぐって―」、東北薬科大学『一般教育関係論集』15、2002年（2016年再編集）、1–22頁。引用は1頁。

3 Vgl. Hinderer, Walter: Versuch über die Schreibweise der offenen Denkform. Anmerkungen zu Schillers *Philosophischen Briefen* und *Kallias, oder über die Schönheit*. In: „Ein Aggregat von Bruchstücken". Fragment und Fragmentarismus im Werk Friedrich Schillers. Hrsg. von Jörg Robert, Würzburg 2013, S. 161–181; Saße, Günter: „Der Herr Major ist in der Eifersucht schrecklich, wie in der Liebe". Schillers Liebeskonzeption in den *Philosophischen Briefen* und in *Kabale und Liebe*. In: Konflikt - Grenze - Dialog. Kulturkontrastive und interdisziplinäre Textzugänge. Festschrift für Horst Turk zum 60. Geburtstag. Hrsg. von Jürgen Lehmann, Tilman Lang, Fred Lönker u. Thorsten Unger, Frankfurt a. M. 1997, S. 173–184.

4 Vgl. Pethes, Nicolas: Zöglinge der Natur. Der literarische Menschenversuch des 18. Jahrhunders. Göttingen 2007, S. 179–183; 津田保夫「シラーにおける魂の不死の問題」、大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化研究』37、2011年、77–97頁　参照。

5 他の例として、以下の研究書も『ドン・カルロス』ならびに『マルタ騎士団』（Die Malteser）における「愛」や「犠牲」を論じる際、『哲学書簡』の記述を参照している点で同系統の研究に属している。菅利恵『「愛の時代」のドイツ文学 ―― レンツとシラー』、彩流社、2018年、特に112–114頁ならびに128–129頁　参照。

6 Hiller, Marion: *Liebe zielt nach Einheit, Egoismus ist Einsamkeit*. Zum Opfergedanken in Schillers *Don Carlos* und den *Philosophischen Briefen*. In: Euphorion. Zeitschrift für Literaturgeschichte, Bd. 99 (Heft 1/2), Heidelberg 2005, S.115–128, hier: S. 118.

7 Vgl. Stachel, Thomas: „Ein unbestechliches Gefühl für Recht und Unrecht". Schiller und der *Moral Sense*. In: Schiller im philosophischen Kontext. Hrsg. von Cordula Burtscher u. Markus Hien, Würzburg 2011, S. 29–39.

8 粗悪な書物の濫読による理性の混乱は、シラーの小説作品『視霊者』（Der Geisterseher, 1789）でも描かれている。この点については、以下の拙論を参照のこと。厚見浩平「「人間学者」フリードリヒ・シラー ―『視霊者』と経験心理学」、慶應義塾大學文學部藝文学會『藝文研究』110、2016年、227–239頁。

9 戸叶勝也『ヨーロッパの出版文化史』、朗文堂、2004年、特に185–193頁　参照。

10 Riedel, Wolfgang: Die Anthropologie des jungen Schiller. Zur Ideengeschichte der

medizinischen Schriften und der „Philosophischen Briefe“. Würzburg 1985, S. 210.

11 アレクサンダー・コジェニーナは、この「人間研究者」を「人間学者」（Anthropologe）と見做している。Vgl. Košenina, Alexander: Kommentar. In: Schiller, Friedrich: Der Verbrecher aus verlorener Ehre. Studienausgabe. Hrsg. von Alexander Košenina, Stuttgart 2014, S. 43–56, hier: S. 44 f.

「人間学」（Anthropologie）の概略や射程等については、例えば以下を参照のこと。Vgl. Ders.: Literarische Anthropologie. Die Neuentdeckung des Menschen. Berlin 2008.

12 Vgl. Bangert, Sara / Müller-Richter, Klaus: ›Nur Taten sind ihnen untertan‹. Subjektkonstitution durch Geständnis und Bekenntnis in Schillers *Verbrecher aus verlorener Ehre*. In: Das Geständnis und seine Instanzen. Zur Bedeutungsverschiebung des Geständnisses im Prozess der Moderne. Hrsg. von Anders Engberg-Pedersen u.a., Wien / Berlin 2011, S. 271–292, hier: S. 278 ff.

13 Nutz, Thomas: Vergeltung oder Versöhnung? Strafvollzug und Ehre in Schillers *Verbrecher aus Infamie*. In: Jahrbuch der Deutschen Schillergesellschaft 42 (1998), S. 146–164, hier: S. 162.

14 福田喜一郎「もう一つの啓蒙論文　――カント『思考の方向を定めるとは何を意味するか』をめぐる諸問題――」、『鎌倉女子大学紀要』13、2006年、39–50頁。引用は44頁。